主題：新しい未来を牽引する子（１年次）

副題：社会的課題を題材とする探究的な学び

１．研究主題について

（１）社会背景

デジタル化の加速度的な進展や、ＡＩ等の技術の発展、脱炭素化の世界的な潮流は、これまでの産業構造を抜本的に変革するだけではなく、労働需要のあり方にも根源的な変化をもたらすと予測されている。また、それに伴い、これまでの公教育で育成をねらってきた、能力・特性とは根本的に異なる要素が求められていくことも想定される。2022 年５月 31 日に経済産業省から出された「未来人材ビジョン」では、次のように述べられている。

> 次の社会を形づくる若い世代に対しては、「常識や前提にとらわれず、ゼロからイチを生み出す能力」「夢中を手放さず一つのことを掘り下げていく姿勢」「グローバルな社会課題を解決する意欲」「多様性を受容し他者と協働する能力」といった、根源的な意識・行動面に至る能力や姿勢が求められる。
>
> （中略）
>
> デジタル化・脱炭素化という大きな構造変化は、人の能力等のうち、「問題発見力」、「的確な予測」、「革新性」をより強く求めるようになり、その結果、2050 年には、現在の産業を構成する職種のバランスが大きく変わるとともに、産業分類別にみた労働需要も３割増から５割減という大きなインパクトで変化する可能性があるということである。　　未来人材ビジョン、経済産業省、2022、pp16-26

また、令和５年６月 16 日に閣議決定された「教育振興基本計画」においても、2040 年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成の重要性を以下のように述べている。

> こうした社会の実現に向けては、一人一人が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、「持続可能な社会の創り手」になることを目指すという考え方が重要である。将来の予測が困難な時代において、未来に向けて自らが社会の創り手となり、課題解決などを通じて、持続可能な社会を維持・発展させていくことが求められる。　　（中略）
>
> Society 5.0 においては、「主体性」、「リーダーシップ」、「創造力」、「課題設定・解決能力」、「論理的思考力」、「表現力」、「チームワーク」などの資質・能力を備えた人材が期待されている。こうした要請も踏まえ、個々人が自立して自らの個性・能力を伸長するとともに、多様な価値観に基づいて地球規模課題の解決等をけん引する人材を育成していくことも重要である。　　教育振興基本計画、文部科学省、2023、p８

私たちは、2050 年を生き抜くために必要とされる能力等を備えた人材を育成していかなければならない。そのためには、新しい未来を見据えて従来の教育から転換を図っていく必要があるだろう。

（２）求められる学び

令和３年答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」では、学習指導要領に基づいた児童生徒の資質・能力の育成に向けて、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向

けた授業改善が必要であると述べられている。

「個別最適な学び」については「指導の個別化」と「学習の個性化」に整理されている。「指導の個別化について」は、全ての子どもに基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力、判断力、表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するために、教師が支援の必要な子どもにより重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現することや、子ども一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどが必要とされている。また、「学習の個性化」については、基礎的・基本的な知識・技能等や、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、幼児期からの様々な場を通じての体験活動から得た子どもの興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、探究において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、教師が子ども一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供し、子ども自身が学習を最適に調整できるようにすることも必要である。

このように、子どもが自己調整しながら学習を進めていくことができるよう、指導の工夫や改善が求められている。

（３）学校教育目標　共に生きる力を育む

本校が定める学校教育目標「共に生きる力を育む」を実現するために、Society5.0 社会を共に生き抜く力と、豊かな社会の形成者として人間愛ある基礎的な資質・能力を育む。また、多様な他者の視点や考えと協働する力を持ち、そこから新たな価値やビジョンを構築し課題解決に向かう力を育成していく。これは、「未来人材ビジョン」や「教育振興基本計画」で述べられている 2050 年を生き抜くために必要とされる能力等と同じ方向性をもっている。本校では、教科等学習指導に限らず、生徒指導・特別活動等、学校の様々な場面において、学校教育目標を最上位に位置づけて育成をねらっている。

（４）研究主題の設定

新しい未来を牽引する子

本研究の目的は、様々な変化が予想される 30 年後の日本（＝新しい未来）を見据え、2050 年を生き抜くために必要な能力等を備えた人材（＝子ども）を育成していくことである。それは、多様な他者の視点や考えと協働する力をもち、そこから新たな価値やビジョンを構築し課題解決に向かう力を育成していくことである。そのためには、新しい未来を牽引するために必要な資質・能力を明らかにし、各教科等において意識的に育成していく必要がある。

そこで、「かしわっ子につけたい９つの資質・能力（以下、９つの資質・能力とする）」を社会背景や学校教育目標をもとに、図１のように整理した。

これらの９つの資質・能力を各教科等を通して子どもに身に付けさせていくことが「新しい未来を牽引する子」の育成につながり、ひいては、学校教育目標「共に生きる力を育む」の達成につながると考える。

聞く力	課題を発見する力	好奇心
共感的に聞くことができる 相手の考えを理解することができる	課題を発見することができる 解決の見通しをもつことができる	資料・題材等と向き合い， 興味関心を高めようとしている
調整力	情報を収集・ 整理・分析する力	挑戦心
みんなが納得の上， 同じ目的に向かうように 調整することができる	目的に応じて手段を選択し， 必要な情報を選ぶことができる 考えの技法を用いて，多様な情報の 特徴を見付けることができる	粘り強く，課題を 解決しようとしている
伝える力	評価する力	向上心
相手意識をもって 発信することができる	学びの過程をふり返ることができる 自己の変容に気付くことができる	学びを生活に生かそうとしている 改善点を見いだし， よりよくしようとしている

図１　かしわっ子につけたい９つの資質・能力

２．研究副題について

（１）研究副題の設定

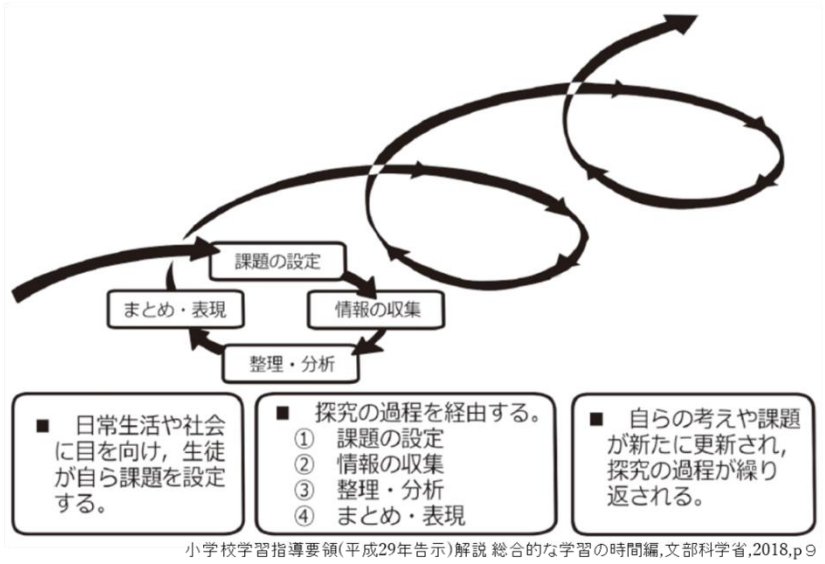
主題実現のために、以下のような研究副題を設定した。

社会的課題を題材とする探究的な学び

「小学校学習指導要領総則」では、以下のように述べられている。

> 各教科等において、物事の中から問題を見いだし、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の問題発見・解決につなげていく過程を重視した深い学びの実現を図ることを通じて、各教科等のそれぞれの分野における問題の発見・解決に必要な力を身に付けられるようにするとともに、総合的な学習の時間における横断的・総合的な探究課題や、特別活動における集団や自己の生活上の課題に取り組むことなどを通じて、各教科等で身に付けた力が統合的に活用できるようにすることが重要である。
>
> 小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説総則編、文部科学省、2018、pp51-52

そこで、本研究では総合的な学習の時間を中核とし、社会的課題を題材とする探究的な学びを位置付ける。探究的な学びでは、子どもが自ら課題を設定し、それに基づいて情報を集め、整理・分析し、解決案をまとめることが重要である。また、この過程で自身の意見や考えを表現することが求められる。表現した意見や考えに対して他者からの質問や意見を受けることで、自身の考えを深めたり、新たな疑問や問題意識が生まれたりする。その結果、新たな課題が浮かび上がり、再び情報収集や整理・分析に取り組むことが重要である（図２）。



小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総合的な学習の時間編,文部科学省,2018,p９

図２　探究的な学びにおける児童の学びの姿

こうして、子どもは自らの考えや課題を更新し、新たな価値やビジョンを構築していく。図２に示す、探究のプロセスを効果的にくりかえし経験することで、本校で整理した９つの資質・能力を高めていくことが期待できる。

また、９つの資質・能力は、総合的な学習の時間のみならず、他のあらゆる教科等においても意識的にくりかえし育成を図ることで習得され、高められていくと考える。各教科等の特性を生かしながら、９つの資質・能力を吟味して育成していく必要があるだろう。

本研究では、次項のような重点を設定し、総合的な学習の時間やその他の教科等において、教師がどのような働きかけで、９つの資質・能力を育成していけばよいのかを考え、実践していく。その過程で、どのような手だてが９つの資質・能力を、各教科等を通して子どもに身に付けさせていくために有効なのかを明らかにする。また、その手だてにより、子どもが資質・能力を身に付けることができたかを評価し、教師の授業改善につなげ、さらに子どもの力をのばしていきたい。

（２）社会的課題を題材とする探究的な学びを実現させるための重点

①総合的な学習における探究的な学びを促す教師の手だての明確化

子どもが、探究のプロセスを効果的にくりかえし経験していくためには、教師の適切な関わり方が必要不可欠だと考える。そこで、まずは総合的な学習の時間における探究的な学びを促す教師の手だてについて模索していくこととした。子どもの求める学びにあわせながら授業を進めていく中で、教師は探究のプロセスをデザインし、子どもと共に学びを紡いでいく。その中で、９つの資質・能力を見極め、身に付けていくために必要な手だてを講じ、実践を積み重ねていく。その際には、小単元または本時で９つの資質・能力を明確にする。そうすることで、総合的な学習の時間において、９つの資質・能力の育成を図っていく。

②各教科等で重点的に育成を図る資質・能力の明確化

本研究では、総合的な学習の時間を研究の中核におきながら、加えて各教科等においても９つの資質・能力の育成をはかる。各教科等でどのような資質・能力が育成可能かを明らかにし実践することで、総合的な学習においても、その力を発揮していくであろう。総合的な学習の時間、各教科等相互において９つの資質・能力の育成を目指していく。

９つの資質・能力を各教科等で意識的に育成していくには、各教科等の特性を十分に活かしていく必要がある。そこで、９つの資質・能力のうち、各教科等で重点的に育成を図る資質・能力を３つ選択し、実践していくこととした。それぞれの教科等のねらいを達成する過程で、どのような９つの資質・能力の育成に関わる手だてを講じることがよいのかを明らかにする。実践を重ねる中で、教科等と９つの資質・能力の関係が整理されていく。場合によっては３つの資質・能力の選びなおしが必要になる場合も想定される。これらを様々な教科等でくりかえし実践する中で、どの資質・能力をどのように育成していくかが明確になると考える。

③評価の工夫

総合的な学習の時間や各教科等で身につけた９つの資質・能力を統合的に活用できるようにするには、身につけた９つの資質・能力を子ども自身に意識させることが必要である。そのために、子ども自身が９つの資質・能力を自覚できる評価の在り方・工夫を明らかしていく。ルーブリック評価・４件法・パフォーマンス評価・自由記述など様々な方法がある中で、どのようなデータを収集すればよいかを探っていく。また、それらのデータを蓄積し、子ども自身がそのデータをもとに、身につけた９つの資質・能力について評価できるようにしていく。

また、教師が授業改善するための評価の在り方・工夫についても明らかにしていく。教科等のねらいが達成できたか評価することはもちろんのこと、９つの資質・能力が育成されているのか、重点①②でとった手だてが有効だったかなど、教師の授業改善の視点からの評価方法を模索していきたい。

それぞれの評価に際しては、スズキ教育ソフトの教育クラウドサービス「edu-cube」内の「トラビ」を活用する。トラビは様々な回答形式に対応している上、学級・グループ・個人の継続的な記録を、表やグラフに可視化することができる。この機能を活用しながら、蓄積したデータをもとに適切に評価を行い、子どもに９つの資質・能力を自覚させ、教師の授業改善につなげていきたい。

３．研究の方法

（１）研究組織と役割

①理論部　～理論を構築する～

〇全体計画の作成・提案　〇理論の構築と提案　〇全体論の継続的な検討
〇学級づくりへのアプローチ・研修等　〇教師の探究観を育てるための方策・研修等

②実践部　～理論と実践をつなぎ 日々の研究実践を推進する～

〇研究授業の年間計画　〇指導案の提案　〇実践例の提案
〇事前研・事後研の運営　〇実践の成果・課題のまとめ

③運営支援部　～探究的な学びに向かう土台作りや教師の授業力向上、外部への発信～

〇研究紀要の校正等　〇教育研究発表会の運営　〇一次・二次案内の作成
〇ＰＲ活動・ＨＰ等　〇授業規律向上の取り組み　〇チームビルディング・職員交流

・各部会が横の連携をとって、自主的・自発的に活動する。
・各部の役割が重なるように連携する。
・詳細についてはリーダー会で調整する。
・必要に応じて合同部会を開く。
・必要に応じてコラボレーション推進室を活用する。

（２）研究授業

①全体研究授業

総合的な学習の時間の授業を年４回行う。探究的な学びや、９つの資質・能力の育成に関わる手だてについて、具体的な子どもの姿をもとに全員で協議する。授業後の協議会では、２つのことを心がけて研究の深化を図っていきたい。

１つ目は、学びの連続性で授業を捉えるということである。本時のみの子どもの姿だけで授業を分析するのではなく、これまでどのように探究のプロセスを歩んできたのか、そしてこれからどうデザインしていくのか、子どもはこれまでにどの資質・能力を身に付け、これからどの資質・能力が必要になるのかなど、学びの連続性を鑑み、授業を捉えていく。

２つ目は、自己視点で捉えるということである。自分だったらこの授業ではどの資質・能力の育成をねらうのか、その授業から得た知見をどう自分の授業に生かしていくかなど、自分事として授業を分析していくことが大切である。

②ブロック研究授業

教科等部会を中心としたブロックを設定し、研究を進める。「教科等のねらいは達成できているか」「手だては９つの資質・能力の育成につながっていたか」の２つの視点を中心に議論を行う。

上記①で述べた２つの視点に加えて、ブロック研授業では、教科等横断的視点で授業を捉えるようにする。この授業で育成をねらった資質・能力が、他教科等ではどう生かされるか、他教科等で育成することができそうか、など、教科等の枠を超えた視点で授業を捉えられるようにしていきたい。

（３）研究発表会

授業を公開し、協議会を通して外部の方々からのご意見、ご助言をいただき、さらなる研究の深化を図る。

参考文献

未来人材ビジョン、経済産業省、2022、pp16-26
教育振興基本計画、文部科学省、2023、ｐ８
小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 総則編、文部科学省、2018、pp51-52
小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 総合的な学習の時間編、文部科学省、2018、ｐ９